
日本召還

ピンガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本召還

【Nコード】

N1361R

【作者名】

ピンガ

【あらすじ】

人類は滅亡の危機に直面していた。滅亡の危機を回避するためエルフ達は困難に全力で立ち向かう。

これは、困難に立ち向かうもの達のお話です。人間社会においてはありふれた日常的な光景ですが、感じ方によっては気持ち悪いと思う方も多いと思います。差別的表現もあります。そういった点をご留意の上でお読み下さい

滅亡の危機

聖曆 5990年4月 東方州 とある田舎

牧場の朝は早い。人舎の人達が既に起きて声をあげている。

「もう、たつぶたつぶだよ。早く搾っててば!!」

マーヤが白と黒のまだらなポニーテールの髪を揺らしながら騒いでいる。

「直ぐに準備するよ。00と01はもう起きているかい」

私が声を掛けると返事があった。賢い子だ。搾乳用の壺を二人で抱えて運んでいる。マーヤ00とマーヤ01は、うちの一番の稼ぎ頭マーヤの子供だ。

ここで声をはり上げているマーヤは毎朝、一杯搾っても一晩で乳が張る程の優秀な雌人だ。ホルスタイン種でもここまで優秀な雌人はなかなかいない。30頭ほど飼っている我が家の搾乳雌人の中でも無論一番の生産量を誇る。

マーヤの子供たちが乳壺を置いたのを確認して、搾乳棚に載せている巨大なマーヤの乳を揉みミルクを搾ってやる。

「どつだ。気持ちいいか?マーヤ」

「.....」

マーヤは恍惚とした表情をしている。乳人として特化したホルスタイン種は乳を適切に搾ってあげないと、簡単に病気になってしまい、最悪死んでしまう事も少なくない。牧場の宝であるマーヤには私も気を使ってしまう。

搾乳棚の下では、マーヤ00とマーヤ01がマーヤに抱き付いている。まだまだ甘えん坊か。

今年で10歳になるマーヤ00は来年には種付けできそうだ。身体も大きくなってきたし母親譲りの乳はここ最近成長し、同年代の乳人に比して大きい。私も期待するところ大だ。

「うん？」

ふと見ると、マーヤ01の様子がおかしい。顔が赤い。マーヤ01はマーヤの息子だ。普通ホルスタイン種の雄は乳加工製品の加工用に処理することが多いが良血種人として牧場に残した子人だ。

マーヤの優秀な血統を残すことが期待された、やはり牧場の期待の星というべき子人だ。

熱もあるし相当に汗をかいている。この年代の子人がかかる病気で思い当たるものもない。いや、これは尋常ではないぞ。すぐに獣医を呼ばなくては！

私は、家にとって返し、後のことを家族に頼むと、町に行って獣医を呼ぶ為に人の準備に走った。

町には馬ではとてもいけない。こんな酪農が中心の山間部では、移動は人の足だ。

我が家では、牧草地の作業労働や移動の足としてウール種の雄人を飼っている。私は急ぎ足で雄人の小屋を覗き込む。

「なんだこれは!」

小屋を覗き込むと、小屋の中の全ての雄人が折り重なるようにして倒れていた。

「死んでいる・・・」

体温を確かめると冷たい、多分昨夜のうちに死んだとしか思えない。何かが、起こっている。私は、頭を抱えながら、感覚的にそれだけを理解した。

聖曆 5990年6月 東方州都 評議会

「全滅です。ホルスタイン、ウール、モンゴ、コーカ、雑種も含め労働用から種人まで全ての成体雄人が、マイツカ卯月熱での死亡を東方州全域において確認しました」

担当事務官の報告に、大きなため息がもれる。頭を抱える者、手で顔を覆っている議員も多い。

「何かね。来年以降、我々はチーズすら食べられなくなるのかね？」

初老の議員が、事務官に質問する。無論ジョークだが事務官は律儀に答えた。

「ハイ、チーズもですが、今年度の種付けは不可能となりましたので人乳も、あと半年で出なくなります。今のところ雄の子人に精通があつた一〜二週間で発病するのを確認しています。その間の種付け成功例はありません」

「皮被りのボーヤでは難しいわね！」

有力氏族出身の若い議員が呟く。多少、力ない笑いが漏れるが長くは続かない。乳人は妊娠中か、出産後暫くしか乳を出さない。常時妊娠させる必要がある。

エルフ法受精も可能だが自然受精でも10回の種付けが必要とされており容易なことではない。

「すると、来年の乳製品の入手は絶望的。実質10年以内にマイツカ卯月熱の対策を考えないと人類は絶滅しかねない。そう考えてよいのだね」

今度は商家出身の議員が確認する。

「はい。現状西方、南方州に確認をとつていますが、確認できている範囲では被害状況は同様です。中央森林地帯に野生種の再確認チームを送つてはおりますが、こちらもなんとはいえませんが」

「野生種など、1000年以上前に絶滅しているわよ。確認するまでもない。」

先ほどの若い議員が声を上げた。野生種の発見報告はここ1000年ない。以前に絶滅報告があつたものだ。

「それでは、我々はどうすればいい。魔因子改造した人間を飼うことで生活が成り立っている。今、人間を失えば、我々として生きてはいけない。紀元前のような混沌の世界で生きよ言うのか！」

多くの議員が発言するが結論は出ない。このような事態は過去6000年間無かったことだ。特に人間の家畜化に成功して、雑食の人間に植物を食べさせ増やし、人間や人間が生み出す乳製品を肉食のエルフが食する完成された秩序が確立してからは。

・・・評議会議長は、考えていた。20年前生まれた王達。やはり変革期としか言いようがない。

エルフに変化が必要な時、エルフには王が生まれる。生物で唯一完成種であるエルフには、生物的な変化は必要ない。それは聖書にも記された通りだ。しかし、エルフに変化が必要な時、突然変異として王があらわれる。1000年周期で起こりえることでそれも聖書に記されている。

王と新たなエルフを生み出す環境を残す為にも、ここは決断しなければならぬ。

「一つ、提案があります・・・」

そう、議長は切り出した。

滅亡の危機（後書き）

それほど、長いお話ではありません。読んでいただければ感謝です。

挑戦

聖曆 5999年9月 東方州 ブザン半島 召還陣作製チーム

今年の初頭、最後の雄人が死んだ。人間が種として自然増加する術は失われた。

エルフにとつとも大きな損失だ。人乳から馬乳への切り替えはまだ試行段階にすぎない。チーズといった加工製品の製作も難航している。人間のように幼人に乳を大量に飲ませたあと殺し、放置しておけば体内で自然にチーズを作り出すわけではない。馬の魔因子改良を繰り返してはいるが、いまだ成功はしていない。

「結局、エルフの運命はこの実験にかかっている。そういうことね。」

私が、確認するように同僚に問う。

「そう。そして失敗はできない。南方州のような結果になったらこの関係者全員の首が飛んじゃう」

南方州は、既に召還実験に成功している。南方州全域から集められるだけの高位の魔術師、魔宝石を集め行った召還実験で呼び出された島には、人間はいなかった。亜人といえる種は確認されたが肉質も悪く、家畜化するほどの利点を得られるほど種は確認できていない。家畜化に適した大型の草食動物も得られなかった。

「南方州も召還技術などの、情報を出してくれればいいのに……」

同僚が呟く。ここ十年でエルフ三州の関係が悪化した。以前なら新たに生み出された技術にしろ情報は相応の対価さえ支払えば得られたものだが、最近は交流がほとんどなく、南方州から有益な情報は得られていない。南方の情報を得られれば、どれほど良いか。

エルフ最大の危機も一部の有力者にとっては、自分の勢力を強める為の機会でしかないのかもしれない。

いずれ魔因子法学で全ての理は解き明かされる。これは魔因子法学の最高権威といわれた偉人の言葉だ。しかし、現実には世の理の一割も解明されてはいない。その一割も解明されていない技術で、我々は、困難に立ち向かわねばならない。

「一定数の原種人間が生息すること、エルフがないこと。言葉が通じること。評議会の連中も軽く条件を出すよね」

「仕方ないでしょ。家畜化できる人間がいなければ話にならないし、エルフがいれば争いになるかもしれない。言葉は、できれば程度の話でしょ。技術的には一番簡単だけど」

評議会の条件は当然ともいえる。マイツカ卯月熱の対策は完了していない。原因は魔因子改良によって作り出された種が病気に弱いことが一因とされている。病気に強い原種であれば簡単には死なないはずだ。また、エルフの召還など拉致誘拐と変らないし、勝手に召還されれば温厚なエルフといえど争いになってしまう恐れも考えられる。争いはエルフ最大の禁忌だ。言語は家畜化を容易にするためだ。家畜化されていない原種の間としてエルフに飼われるのが幸せであることに変わりはない。言語に関しての法学はかなり解

明されているので、多分問題はないだろう

東方州の高位魔術師、魔宝石。最高のものをかき集めての実験だ。二度目はない。

「さて、これで準備はいいかな。あとは月が満ち力が蓄えられるのを待つだけね。局長に報告しましょう」

私達は、ここでの準備を終え報告のために戻ることにした。

聖曆 5999年9月末 東方州 ブザン半島東端 海上

「あれが、召還された島か。あまり大きくはないな」

長身のラウルが竜の背で立ち上がりながら皆に声をかける。

「魔法局の話では召還されたのは諸島だそうよ。数ある島のうちの一つでしかないわ」

魔術師のウイリーが答える。

「しつつかし、どれほど島があるかしらないけど確認は手間よね。」

私が問うと、やはりウイリーが答える。

「いいんじゃない？ お仕事多いほうが助かるわ！ ウチのパーティはお金がかかるから」

「竜持ちは金がかかるからな！昨今の食料事情では仕事は選べん」

私達は、冒険者だ。仕事であり生き方でもある。東方王生37氏族の生まれだが傍系の私にとっては家よりも氏よりも、仲間のラウルやウイリーそして竜のほうが大切だ。

もつとも、その仲間の食費で働きずめなのはどうかしたい。なんとかここで一発当てたいところだ。その為にも今回の依頼、召還島の探索及び人間の確保はなんとか成功させたいところだ。もし失敗したら騎乗している三頭の竜の食費もでない。

「ラウル、島に人間がいればその食料問題も解決よ！ まだ、個別の確認はできないけど人間大の生命反応は感知しているわ。」

「そうか！ それは期待がもてるな。こいつらにも腹いっぱい食べさせてやれる。」

ラウルが海上を進む愛竜の頭を撫でながら答えた。

本当に今の食料事情は悪い。肉食のエルフが三食に二食は、植物の種子を粉にして練った人間のエサ同然の食べ物を食している。胃が受け付けず貧困層では体調を崩したり餓死した者も少なくない。

チーズといった乳製品にいたっては本家の上級氏族でさえ、ほとんど食べていないという話だ。

「じゃあ、あれ食べちゃおうか、乳肉。」

私は、とっておきのホルスタイン種の乳肉を取り出した。干し肉だが、乳肉は栄養価が高く保存食

として最高の素材だ。10年前の冒険者は冒険中三食これを食べていた。

「いいね、食おうぜ！」とラウル

「あら、最後の品じゃなかった？ いいの食べて？」とウイリー

「なんか希望が見えてきたし。前祝いで景気付けに食べときましようよ！」

私が答えると、ラウルとウイリーから歓声上がる。

.....

目標の島に大分近づいてきた。

「あれ、もしかして船じゃない？」

「本当だ。それなら大助かりだ！」

ラウルとウイリーがこちらに顔を向けながら話す。同氏族であるラウルとウイリーだが顔つきは随分異なる。一人の母からなる同一魔因子なのだから、魔因子的にはまったく同じになるはずだが、育った環境でここまで変るいい例ともいえる。

確かに船と思われる白いものは海に白い軌跡を引いて動いている。しかし、帆が無いしオールのようなものも出ていない。何を動力としているのだろうか？ 文化水準の高い人間の方が家畜として利用価値が高いのは言ってもないが、エルフの私が理解できないのは少し面白くない。

「もしかすると、エルフがいるんじゃないか？」
「でも、魔力は感じないわよ！」

同じことを思ったのかラウルとウイリーが同じ疑問を口にする。しばらく見ていると、こちらに近づいてきた。

かなり早い。水陸両用の竜より確実に早い。軍船より早いのではないか？

見る間に近づいてきた。大きい。50人は余裕で乗れそうな船だ。船上に数人の人影が見える。30m程の距離を置いて、船上の人間が声を掛けてきた。

「おーい！ 大丈夫かー」 「xxxxxx xxxxx」

最初はエルフ語だったがその後は未知の言語だ。とりあえず言葉は通じそうだ。ウイリーに目配りすると頷く。やはり魔力は感知していないようだ。

間違はなく人間だ。我々エルフは救われた！私は感動で色々こみ上げてきた。今までの苦労が報われる思いだ。

「あんたら、遭難者か？」 「xxxxxx xx xxxx」

白い船は慣性だけで動いているようだ。先ほどの速度はない。見たところ、攻撃的な種族ではないようだ。

言葉は失礼ないようだがまあいい！ 昔だったら手打ちにするところだが、家を出て私もこなれた。丁寧な言葉を話す人間は上級の氏族に飼われている人間くらいで、多くの農場や一般家庭で働く人

間はろくな教育も受けていないし、主人を主人と思わない人間も少
なくない。ましてや、こいつらは野生種だ。

「私達をその船に乗せなさい！」

.....

多少、トラブルはあったが問題なく船に乗ることが出来た。私達は
多くの驚きをもって彼らに迎えられた。この船の若い雄人は何が嬉
しいのか、エルフモエモエ等、奇怪な言語を発しながら手に持った
ケイタイで光を発している。

船長を名乗る、頭にキャプテンマークらしい布紐を巻きつけた雄人
は、会話に混ざろうともせずに、先ほどから船の中央にある神体に
むかって呪文を唱えている。一切魔力を感じないところを見るとペ
テンや呪い類いか。魔法局のいった言葉が通じるとはこんなものだ。
人間供の言葉の半分も理解できん。

しかし、こいつら魔法ではないが似非魔法のようなものを使う。
ケイタイの光もそうだし船の動力もそうだ。これらについてはパー
テイの知恵袋のウイリーも頭を捻っている。

この船の名は第八鉄拳丸。漁船だそうだ。これほどの大型船が軍船
でもなく商船でもない。このことから外敵もなく、また、商業が活
発ではないことが伺える。しかし、衣類を見たところ色が多彩だ。

この船の船員達は、外観はモンゴ種に非常に似ている。見たことは
ないが記録にあるモンゴ種の原因に近いのではないだろうか。ただ、

残念ながら黒髪は船長だけで、他の船員は茶や金色の髪が多い。雄人の髪は商品価値がないのである意味どうでもいいが。

また、私達エルフだけではなく竜の存在にも驚いている。三頭の竜は船に乗せることができなかつたので海に置いてきた。船の速度にはかなわないが、付いてくるようには言っている。

船が、彼らの言う対馬に着いたら竜を待つて行動しよう。冒険者は慎重でなければ生き残れない

死を賭した情報

聖曆 5999年9月末 日本領 対馬 海上保安庁事務所

私達は、竜の到着を待つ間もなく、港にいた彼らに囲まれた。私とラウルの剣は取り上げられ、ウイリーの杖も取り上げられ部屋に連行された。私達は個別に取調べを受けている。

何とかと名乗る雄人が私の担当だ。牧場主なら何頭だろうと家畜の顔と名を覚えるそうだが、冒険者の私にそんな技能はない。人は人だ。

彼らが、比較的温厚な種族であることは私にもわかる。しかし。この無礼さはどうだ。聖書に記されたモンゴ種の原種は、エルフを見るとその崇高さに跪き家畜化を願い出たと記されている。抵抗した後には家畜化された他の原種とは確かに対応が異なるが、私の我慢も限界に近い。

「すると、あなたは、エルブレイ氏族のマターハ・ナーウさんで・・」

「東方王生37氏族 巧みの王を産んだが抜けている！ 貴方は礼儀がまるでわかっていない！」

迷惑な隣国人の対応を日常業務としているここの事務員にとって、この程度のことはどうということはない。

「失礼しました。東方王生37氏族 巧みの王を産んだエルブレイ

氏族のマターハ・ナーウさんですね。調査の為にここ対島にやってきた。それで間違いありませんね」

私は鷹揚に頷く。

「マターハ・ナーウさんはエルフ東方州の依頼でやってきた冒険者さんでよろしいですね」

私が頷いていると、念話でウイリーが伝えてきた。

（ラウルが限界みたい。私も目の前の人間を魔法で眠らせちゃった！）

私も呪文を唱えかけなので、声を出さず意識のみで答える。別に杖が無くても意志を通じた装飾アイテムがあれば魔法は使用できる。

（ああ、私も、もう限界。竜達ももう島についている頃だろう。とりあえずこの雄人は焼いちゃうから！）

正直なところ、少し安易かなとも思っている。港にあった100隻以上の漁船の群れ。遠くに見えた更に巨大な船。もしかした似非魔法は馬鹿にできないとの思いが少なからずある。あるが、面白いなものには仕方がない。

「燃えちゃえ！」

私がある言葉を発すると、前にいた雄人が燃え上がった。

「すると何、最も近い島に先発した冒険者のうち島にたどり着いた8組は全て連絡が途絶え、生体魔力反応も確認できない状態にあると。」

「ハイ。島にたどり着けなかった2組を除いて、8組全てがそうです。生体魔力は海上ならともかく上陸してしまうと障害物が多いので確認は難しいものですが・・・」

私の問いに魔法局の担当官が答える。

8組の冒険者からの情報で、わかっていることは、まだ多くない。

- ・ モンゴ種の原因に近い人間が存在する。
- ・ 多数の大型船を要し、未知の魔法？を使用し動力としている可能性がある。
- ・ 数万頭の間人が生息している。
- ・ 陸上で馬や人、竜以外の交通手段を持っている。冒険者らの意見では鉄の竜という表現が近いらしい
- ・ 近海や島で大型の飛行竜の目撃例あり。ただし詳細は不明
- ・ 彼らの多くは日本人と自称する。少数ながら韓国人と自称するものもいた。
- ・ 島の名前は対馬。更に南部に日本の本島がある。
- ・ モンゴ種と思われる人間は好戦的ではない。ただし、無礼で傲慢であり。エルフに対し対等に接しようとする問題行動が見つけられた。
- ・ 対馬に生息する人間の味は良好。幼人も食したが体内にチーズ等の乳製品は確認できず。
- ・ エルフ語は通じる。通じない種族も島内で確認した。
- ・ 髪の毛の色は茶と黒が多い。雌人の多くは茶。商品価値の高い黒髪

は小数。

- ・雌人は顔に塗料を塗っている。宗教的な意味を持つものと思われる。聖書にある刺青の民との共通性に類似。
- ・エルフの存在は確認していない。

上記は複数の冒険者が確認し信頼性の高い情報だ。下記の情報は今のところ、個々に情報が発信されたもので信頼性が薄い。

- ・日本本島には一億頭以上の人間が生息している。
- ・科学という魔法と異なる技術体系を持っており魔法に対するものだ。

- ・飛行竜は人間が操って飛ばしている。
- ・鉄の竜はジドウシャといい、やはり人が乗って操っている。
- ・鉄竜は人間とほぼ同数生息している。
- ・魚を常食とする肉食性の高い種である。
- ・米といわれる種子を常食する草食性の高い種族である。
- ・肉食である。野蛮な同族食いの可能性もある。
- ・日本人は武器を持たない。
- ・くの字形の護符を必ず所持しており、暇があれば眼前にかかげ念じている。効果は不明。
- ・ケイタイと言われるマジックアイテムを携帯し、耳にあて呪文を唱える。やはり効果は不明。
- ・戦闘力は皆無。魔法に対しての警戒心もない家畜種らしい特徴を持つ。
- ・非常に臆病。こちらから声を掛けないと声をかけることは無い。
- ・既に家畜化されている可能性あり。命令せずとも勝手に食料を調達してきた事例あり。

多くの詳細は不明だ。それでも、我々は進めなければならぬ。人間がいる。これがわかっただけでも大きな前進であり、明日への大

きな希望につながる。

多少の障害は、折込済みだ。

「かまいません。予定通りに軍を上陸させなさい。そして、最低でも100頭の人間の雌雄を確保するように！」

「はっ、了解しました。將軍に伝えます。」

侵略

聖曆 5999年10月 東方州 ブザン半島東端 海上

「所属不明の木造船につげる。ここは、日本の領海です。これ以上近づけば射撃します」

先ほどから、似非魔法を使った声が聞こえてくる。上陸船最大の300人船に匹敵する巨船だ。帆も櫂もないくせに、魔法動力を持つ我々の船より足が速い。

しかし、巨艦は二隻だけ。他の100人船が数隻あるが100隻の上陸船を止め様はあるまい。

「ボウー」という海牛の鳴き声が聞こえてきた。敵の巨船が光と音を発している。あれも似非魔法か？

「筆頭艦長、敵艦が何か礫のようなものを投げているようです。しかし、全て外れています。攻撃しますか？」

「いや。まだいい。」

積極的な攻撃の意志が感じられない。人間達は何がしたいんだ？

もう、6時間になる。対馬は間近だ。人間の船は機動力を生かして、周りを水澄ましのように回りながら、礫を放つが、相変わらず当た

らない。こちらは一度も舵を切っていない。まっすぐ対馬を目指している。

また、巨船がこちらの進路をさえぎるように移動してきた。ぶつける気か？

「先頭の船に伝える！ 接触と同時に白兵戦の用意だ」

意図がわからない。最初は威嚇かとも思ったが、ここまで当てないのにどんな意味がある。体当たりも速度を生かすつもりがないらしい。

「少なくとも、野性の怖さはないな。既に家畜化されているとの噂は本当かもしれない」

「第17番船 アカツキ 敵巨船にぶつかります。い、今、当たりました。」

金属と木が合わさるイヤな巨音が響く。船乗りが一番聞きたくない音だ。

「仮に鉄製の巨船だろうと、横っ腹に全速の船に当たられては堪るまいに。」

戦を知らんのか？我々エルフとて戦を知らない。書物で知るのみだが。理も知らないか。やはり我々が導く為の種か。

「筆頭艦長、もう一隻の巨船及び、100人船が近づいてきます。」

「もう、かまわん。攻撃を開始しろ！」

「ハッ、各船攻撃を開始！」

見ると、巨船からの海牛の鳴き声のような音を発する礫は、魔法で強化した船を容易く破壊している。相当な射程を持っているようだ。

「生き残っている巨船に魔法弾を打ち込め、魔法も集中させる！」

巨船に魔法弾が炸裂した。射程は短いが外れないし、威力も大きい。巨船の船上が燃え上がっている。

「接触した巨船も制圧しました。敵の巨船2隻大破、1000人船2隻大破 100人船1隻、小破。他の船はまだ近くにあります。艦隊と距離を置いています。我が艦隊は200人船が1隻が中破、50人船6隻が航行不能となっております。」

「ふん。動けない船の人員を他の船に移動させる。海に落ちた乗員や人間の救出もいそげ！」

「ハッ」

意外に損害が多きい。本気で戦えば、あの巨船はどのほどの戦力があるのか。統治したらあの船を作らせるのも面白いかもしれん。

聖暦 5999年10月 日本領 対馬 山中

状況は悪い。最初に連れ込まれた建物を燃やし、脱出は成功した。街中に出ても他の人間に特別警戒されることもなく、エルフヤコスプレと声をかける人間もいた。もしかすると、神話や伝説にエルフが現れるのかもしれない。珍しさの驚きは感じても忌避感や危険

に思っている様子はなかった。

お腹も空いてきたと思い。その辺を歩いていた母人と子人をウイリーの魔法で寝むらせた。流石に母人は重く持っていけないので放置。子人だけを持ち帰りお弁当とした。この母子。エルフ語がほとんど話せなかった。そこで、ひらめいた。もしかしたらこいつらは奴隷か。

人間は同族を強制的に使役する野蛮な奴隷制度を持つと古い本にあった。奴隷であればまともな教育が受けられず、言葉が話せなくても不思議は無い。温和な種族に思えたのは勘違いか。少なくとも無礼、傲慢さは骨身にしみた。

と、そろそろ竜たちと合流しようと思っていたが、竜の意識が切れた。間違いない。これは竜が意識を失ったか、死んだかのどちらかだ。

今まで、剣、弓と武器らしい武器を見ていない。最初に乗った船の船乗りが持っていた鉄製の槍くらいだ。あんな精神の入っていない槍では魚は突けても竜は倒れない。根性が違う。

すると、どうやって倒した？ エルフの魔法を除けば竜は最強の生き物だ。得体の知れない何かを感じる。

「ピン、ポン、パンポーン　ただいま、エルフの格好をした殺人犯が島内に潜伏しています。見かけた方は……」

広域音声拡声魔法に似た感じの放送では、我々三人の特徴が上げられていく。

「ナール拙くない？隠れないと。なんだか知らない間に人間の間で凶悪犯人にされてるよ」

「我々は何一つ、恥じる行いはしていない！　が、容易に誤解が解けるとも思えない。とりあえず

隠れて様子を見よう！」

私の言葉にラウルもウイリーも頷く。　やはり仲間である竜を失ったのは大きい。そうやって隠れて、三日になる。幸い、食料を確保していたので潜伏には問題なかった。人間は子人の肉が一番旨い。

しかし、動きが取れない。山中に入ってくる人間は多くないが。裾に見える人間達の数が増大している。既に万を越えているように思う。我々の動きに呼応しているのか。何かが起ころうとしているように見える。

聖暦　5999年10月　日本領　対馬　港

我々が上陸すると、万を超える軍勢が囲んでいた。　上陸軍は一万。数の上では不利だが、通常エルフ一人は人間10人以上の戦力がある。十分戦える。

相手の出方を見るために、攻撃を控えたが、相手から攻撃も攻撃を準備している様子もない。様々な軍旗やのぼり、いかにもな軍勢ながら肝心の武器も見つからない。魔力のかけらもないことから魔術師にもみえない。

敵の軍勢からは、ハイワケンポーやキュウジョウといったよく判ら

ない関の声が、聞こえてくる。

そのうち大きな白い旗をもった小集団がこちらに近づいてきた。

「我々は、対馬無防備宣言同盟の者です。我々は平和の為に無防備を宣言します」

「こちらは、東方州先遣部隊だが、降伏するということかね？この島の人間全員が？」

「ハイ、降伏し武力的な抵抗は行いません。一部了承していませんがほとんど市民は賛成しています。ここは民主主義国家で私達は市民団体です」

.....

「將軍、というふうなことです。どう判断されます」

「降伏は認める。見た限りでは誰も、武装していないように見えます。オイ、アレを用意して全員につけさせる」

報告で、既に家畜されているとの話もあったがこういうことか。

港に集まったいた人間共に戒めの首輪を装着していつている。若干、騒ぎが起きたがエルフからの信頼の贈り物と説明すると特別、危険なものでもないのですぐ騒ぎは収まった。

彼らの話によると、必ずしも対馬全体の意志ではないらしい。本土から来た市民団体と名乗り、時折キュウジョウと変な声を発する特異な人間の集団と韓国人という元々地理的に東方州に住んでいた集団のようだ。

彼らは日本政府という組織と敵対する関係にあることは、なんとなく判った。対馬の元の人口より市民団体や韓国人のほつが多いらしく、多数決で彼らの主張は正しいそうだ。

私にとってどうでもいいことだが、これで、人間を送れる。今すぐは無理でも食料事情はこれで改善されるだろう。

筆頭艦長の進言していた、人間の船も摂取しなければなるまい。ここに橋頭堡築くのもこれからだ。

見えた希望

聖曆 5999年10月 東方州都 評議会 評議会議長室

將軍から朗報が届いた。5万人の人間を確保し、既に折り返して1万人の人間を輸送中とのことだ。ここ十年これほどのいい話はなかったと断言できる。

情報は既に各部署に伝わっているのか、各部署の縄張り争いが激化している。順次こちらに送るといつているのだ。争うこともあるまいに。

まあそうはいつでも、優先順位は必要だな。対馬が転移して、まだ一週間。マイツカ卯月熱の影響も確認しなければいけない。医療局、魔因子法学局に雄人を相当数回さねばなるまい。確度の高い情報で日本には一億もの人間がいる。人体実験で1万人程度使い潰しても問題あるまい。農産局やエルフ工管理局には少し待ってもらおう。

見つかった人間は今のところ原モンゴ種に似た種だけだ。人間の魔因子改良的には完全に半歩後退だ。

マイツカ卯月熱を克服しても、他の種の雌人に種付けすれば能力的に半減する。ホルスタイン種の濃厚なミルクやウール種の透明繊維など、一時的には失われるのは残念だがいずれ復活する。

何、後宮管理局にも食用の幼人を回せだ！ 私とてエルフ。王命なら従うが名門氏族の調整係りが何を言うか！

聖曆 5999年10月半ば 対馬 港 東方州エルフ橋頭堡 将
帥館

日本政府の代表と名乗るものとの接触があつた。日本政府は戦闘を避けたいようだ。我々も好んで戦闘したいわけではない。一応、島から出ていってくれとも言っているが、強い姿勢ではない。

彼らの言う大陸、我々の東方州に渡りたい人を受け入れることについては了解した。

市民団体と名乗る連中はよく働いてくれる。超巨乳の10歳〜25歳の女の子とHする仕事。大陸には1000万人もの女の子があなたを待っています。というコピーでニートといわれる集団や魔法使いを自称する連中が大量にやってきた。26歳以上の人間の雌は食料として全て食べてしまったし、ここ10年子人は生まれていない。雄は病気で全滅した。嘘は無いがこんなこと誰が言い出したんだ？

韓国人や朝鮮人と名乗る者の数も多い。最初はここ対馬が観光地で隣国からきて取り残されたという話だったが、日本に強制的つれてこられ奴隷のような生活を送っていると、エルフより偉そうに主張する。騒がしい。既にこいつらには戒めの首輪をつけたので東方州に送ろう。

日本も食糧問題で随分困っているようだ。それだけではなく、石油など様々な物資を交易できないか打診している。人間のエサについては多少は余剰がある。しかし、大陸全体でもエルフ、人間合わせ1200万を少し越える程度の経済規模だ。対応できる物資には限界がある。

相変わらず、市民団体は協力的だ。良い家畜の見本とっていいだろう。彼らの調達してきた船で人間の輸送速度があがった。一日最低1万人を送っている。

東方州から我々派遣部隊に送られてくる手紙にはいつも泣かされている。町から栄養失調の子供がいなくなった。寝たきりだった母が、妊娠したホルスタインのミルクで元気を取り戻した！こんな感じの手紙が大きな木箱に入って送られてくる。兵にも手紙の多くを回覧させている。軍務についてるとはいえ、皆に喜ばれる仕事が一番だ。

聖曆 5999年11月 東方州都 評議会 評議会議長室

心配していた、マイツカ卯月熱の発病はなかった。もともとこの人間が耐性をもっていたのか、野生種だからかはよくわからない。

魔因子研究で、見た目だけではなく、モンゴ種原種に極めて近い種族であることも確認できた。

人間の入手は順調だ。流石に將軍、日本では移民と言葉を変えるだけで数多く集まってくる。毎日一人ほど送られてくるので、南部州には毎日1000人程輸出している。原種のわりに体力がなく、途中でバタバタ死んでいるそう。まだ300Kmも進んでない。陸路で転移門まであと500Km近くあるのだが。これでは、最近交渉のない西方州への輸出は難しい。あそこは転移門も二度使うからこの倍以上の距離になる。

情報では日本でも食料不足らしく、口減らしで最低1000万人程

度は送りたいそうだ。こちらから人間の工サとなる穀物を少量送ったが、食料が豊富にあるとも思ったのだろうか。

東方州のエルフは100万を越える程度。1000万も送ってもらえば、全土のエルフの腹も満ちる。

十年前は東方州だけでエルフ、人間を合わせ1000万はいた。当座はともかくしつかりと繁殖に生産に回さねば。

送られてくる雄雌比を確認したところ、7：3で雄が多いそうだ。雄が多い分には農場で働かせ、いざとなれば他州に輸出すればいい。生産の現場から、外人の評判が悪いとの声があがっている。日本で生まれたモンゴ種以外を指す言葉だそうだ。詳細はこれからだが問題の多いのは全部輸出に回せ！ 変な血を州に入れるな。

策謀

聖曆 5999年11月 対馬 港 東方州エルフ橋頭堡 将帥館

最近の移民は子連れの雌が増えてきた。これは中国人と呼ばれる種で、里帰りという慣習らしい。

東方州で外人の評判がよくない。言葉が通じない。暴れる。生産性が悪いと、良く選別するようになると言ってきた。協力的な市民団体に聞くと日本人の行くところ近隣外人は必ずセットだそうだ。現行、選別は難しい。東方州でも外人は輸出に回しているようなので、かまっていられない。

雌の割合が増えてきた。40歳を過ぎた雌などどうすればいい？
繁殖には回せないだろうし、労働にも向かない。潰すか？

日本人の雌は年が逝ってもけっこう美味しく食べられます。と、筆頭艦長が言っていたな。クソ！ あの女、二日に一度は東方州に戻っているから、しっかりと生の人肉食べやがって！ こっちは軍の乾燥人肉ばかりなのに！！ 休暇の申請だ。それしかない！

聖曆 5999年11月 西方州 州都 王城

「……東方州では、順調に移民という形で、人間を手に入れている模様です。雄人が手に入ったことによって種付けも順次成功し、以前の繁栄を取り戻しつつあると……」

「……ふむ、それは西方州としては面白くないな。しかし、家畜

として神に定義された種といえ進んで家畜になりたがるとは。にわかには信じられんな。」

「はい、そこは再度確認を入れています。場合によっては妨害工作の指示も出しております」

「それは、進めておけ。われらの、召還計画のほうはどうか」

「ハイ、日本の情報が入ったお陰で、場所も島も限定できました。イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドという諸島にイギリス人というコーカ系の人種がすむ地域があるとか」

「よし、準備できしだい開始しろ」

聖暦 5999年11月 東方州 ブザン半島東端 海上

我々は、生き延びた。正義の剣あるところ必ず悪は滅びる。竜を失ったのは大きな痛手ではあるが、人間の入手が容易になった今、竜の生産も順調に進んでいるそうだ。多少は安く手に入れられるだろう。

私は、今、船上にいる。大任をはたし、聖なる我らが住む土地への帰還の途にある。海風が心地よい。

「ウチの子供知りませんか？ 赤い服を着た5歳の女の子なんです
が・・・」

気分を出していると、憔悴した顔の無粋な雌が失礼にも声をかけて

きた。先ほども、なんとかと名乗った雌人が一心不乱に子供を探していた。海に落ちたんじやないのという確率の高いアドバイスを口にせず、エルフらしく華麗に無視するやさしい私だ。

新しい竜を手に入れる為の戦いはもう始まっている。

先ほど、船を一回りすると高く売れそうな子人を2、3匹見つけた。大人はそうでもないが、子人くらいは良く船から落ちるものだ。ウイリーに目配りすると、あつという間に眠らせ、間を置かずラウルが荷袋にしまった。今回の冒険で更に高まったチームワークは健在だ。

対馬の山中で人間に見つかったときにはあせったが、最初に会った市民団体を名乗る連中の話では、冒険者エルフが島で行ったことは、日本政府の陰謀だったことがわかり、全て日本が悪かったそうだった。知らぬまに誤解が解けて私も助かる。

しかし、この市民団体という集団。なにが目的なのかよくわからない。自発的に戒めの首輪をつけたそうだった。優秀な家畜種とはこういうものなのだろう。

聖暦 5999年12月 対馬 港 東方州エルフ橋頭堡 将帥館

結局、休暇は認められなかった。將軍とはいえ宮使いは辛いものだ。日本政府が移民者の数を増やしてくれと頼み込んできた。東方州は厳しい環境なので若い個体が望ましいと以前から伝えていたのだがリストを見ると、40代どころか60代以上が多い。日本政府の担当官は土下座と言う彼らの神事を駆使して願い出た。更に年金

問題とか、よくわからない念仏を唱え出した。

前までだったら、断ったところだが、OKした。南方州の輸出要請が頻繁らしい。輸出枠を増やしたそうだが、更に死者が増えて南方の転移門への街道は数万人の死者を出しているそうだ。乾燥した地域が多いので、内臓を裂いてほうっておくと乾燥肉になるとの話だ。水だけ渡して、食料は途中の道で、各自に調達させているらしい。共食いだが、耐性のある原種だ気にする必要も無い。

そういった話を聞いているので問題ないと判断した。今では一日当り、この島から5万人の輸送になっている。暫くはこのペースだそうだ。

日本も一息つけそうです。と担当官が話していた。何でも煩い人間が随分いなくなって、北の開発が急ピッチで進んでいるそうだ。

寒さに弱いエルフにはどうでもいい話だ。

明るい未来

聖曆 5999年12月 西方州 州都 王城

「陛下、東方は300万もの人間を日本から入手し、空前の景気だ
そうです。」

「ふむ。やはり面白くないな。工作のほうはどうなっている?」

「まだ、思うようには結果は出ておりません」

「うーむ。そうか。続けよ。召還計画は?」

「ハッ、この者から新案の計画提出が出ております」

.....

「.....ふむ、等価交換理論を応用しイギリスを召還する際に、日
本を元の世界に送り返すことが可能だと?」

「先の話のように時間的な差異はないのだな。よし、その計画、進
めよ火急だ。」

(伝聞によれば、イギリスの人間は、日本の半分程度だそうだが、
東方が実際に入手した人間は300万、召還日まで増えても500
万程度。最終的に5000万の人間を手に入れれば、真王の条件を
満たすのは余だけか)

「フツ。勝ったな！」

聖曆 5999年12月 対馬 港 東方州エルフ橋頭堡 将帥館

日本政府から、我々の退去要請の話がまたあった。いつもあるのはあるが、今回は強い調子で言ってきた。日本政府の担当官の話では保守と名乗る集団の要請らしい。先日の話では煩い連中が減ってやりやすいとか言っていたはずだが・・・日本も少なくない問題を抱えているようだ。

実は一万人いた上陸兵も今では駐留部隊2000人ほどだ。ここでは大っぴらに人肉が食えないので多くの兵は東方州に戻している。日本政府と市民団体の協力で人間の輸送に、こちらのエルフが関与する必要もなくなってきた。

既に1000万人の移民を条件に退去の密約はできているが、移民が完了していない以上退去するわけにはいかないが、評議会に伺いくらいはしておくか。少なくとも彼らは約束は守るし協力的だ。

聖曆 5999年12月末 西方州 西部 カレ湾沿い

「提督、成功です。西方に陸が現れました」

「おお、そうか。まだ、見えぬがどれほどの距離だ」

「はっ、魔界反射板によると30Km西に陸地と人間大の生命反応

「だそうです」

「よし、王城の陛下にお伝えしろ。これからが、大変だぞ。5000万もの人間を家畜化せねばならない。心してかからねば。全艦隊西に進路を取れ！これで、西方は。西方は救われる！」

聖暦 6000年1月 東方州都 評議会 評議会議長室

「何、日本が消えた。だと？」

「ハイ、12月末の満月の夜に突如として消え去りました」

「どういうことだ？召還した島が消えただと？」

「魔法局の連中は何と知っている」

「ハイ、調査中とのことで、正式な結論を出していません」

「駐留の部隊は？」

「日本と一緒に消えたかと・・・」

・・・日本から手に入れた人間はおよそ500万人。半分以上、繁殖に向かない潰して食用途にするしかない人間だ。魔因子による品種改良も着手したばかり。過去のように完成した秩序を取り戻すのに時間がかかるが、単に時間だけの問題だ。駐留部隊と予定していた500万の人間は惜しいが。

「南方州に向ける予定の人間は、全て労働用に回せ。街道の肥やしにするには惜しい」

「ハッ。既に送り出したものも戻しますか？」

「いや。奴らにも必要だろう。種付け用に10万も雄人がいれば文句は言うまい」

「了解しました。そのように処置いたします」

担当官が去っていくのを見ながら、私は思う。この世界の人間の絶滅の危機は救われた。そしてエルフも救われた。困難があるうとも皆が力を合わせれば立ち向かうことは可能だ。聖書に記された通りである。

さて、王擁立も間近だ。準備を急がねば。

終末（前書き）

今回が最終話になります。

終末

聖曆 6000年1月 西方州 西部 カレ湾西 海上

「所属不明の木造船に警告す。ここは、大日本帝国の領海だ。これ以上近づけば射撃する」

先ほどから、似非魔法を使った声が聞こえてくる。遠目でも見たことのないほどの巨船だ。1000人は優に乗れるに違いない。帆も櫂もなくせに、魔法動力を持つ我々の船より足が速く、引き波を越えるだけで船が転覆しそうな揺れだ。

東方の連中は、これに勝利したというのか。信じられん。見れば、判る。奴らは強い。

「うっ 撃って来ました！」

轟音と共に、併走していた300人船が吹き飛んだ！ 驚いている暇もない。次々に我々の船が微塵にされている。何なのだ。船の一部が光り音がしたと思うと僚船が吹き飛ぶ。

「本当に魔法ではないのか？」

「魔法の反応はありません！！！」

こちらの射程距離には、まだ、遠い。魔法弾も長距離魔法も届かない。このままでは上陸部隊3万が魚のエサと化してしまう。

……私は、決断した。

「皆、死んでくれ。突撃し白兵戦しかける！ エルフの意地を見せるのだ！」

聖曆 6000年1月半ば 西方州 とある牧場

牧場の朝は早い。

ここ十年は乳搾りどころか、種付けすらもない。25歳を超える雌人は既に潰して食肉にしているので、若い雌人ばかりだ。

号泣しているか寝ているか。私が近づくと抵抗することも多い。昔のほのぼのとした雰囲気は既がない。

人舎の方から嬌声が聞こえる。どうということだ？ 人舎に入るとどこから入り込んだのかカーキ色の服を着た数人の雄人が牧場の雌人にさかんに種付けをしている。何が起きている？

パンと音がした。腹が熱い。と思ったら血が出てきた。

「この人食いの鬼ども、くたばりやがれ！」

下半身を雌人に埋めている雄人が、短い槍を持ちながら叫んだ。私は思った。こいつらは何を言っているんだろうと。

聖曆 6000年1月半ば 西方州 州都 王城

300隻の船と3万の精鋭を乗せた上陸艦隊は全滅した。それどころか、大日本帝国を名乗る連中は西方。我等の神聖なる土地に侵入し犯している。

召還は成功した。人間の原種が存在すること。エルフがないこと。エルフ語が通じること。全ての条件は満たしている。また、東方にあった召還島。日本は消え去った。これも成功だ。誤算は召還した島が予定していたイギリスではなく、大日本帝国を名乗る輩であったことだ。

この連中は、非常に野蛮で凶暴であった。平和の使者として赴いた我々の上陸艦隊は、その意志が報われることなく、海に消えた。そして無言で我々に対し侵略を開始し始めた。

大日本帝国の輩は似非魔法というべき面妖な技を使う。エルフが神より与えられし魔法よりも、遠方より攻撃してくる。伝え聞く日本人は武器も持たず争い自体なかったらしいが、こいつらは違う。

「陛下、大日本帝国との接触到に成功いたしました。」

「うむ。で、連中は何と言っている。」

「ハッ、人間を食べるのはやめると。それが了承できるなら交渉の用意はあると」

我等に食を絶てとは、嘗て、これほどまで傲慢なことを言い放った存在があっただろうか。

「やむなし。躡だ。エルフの力を大日本帝国に見せつけよ。！」

ん。外から虫の羽音のような音がする。窓から外を覗くと、不恰好な羽をもつ何かが飛んでいる。見ているとフンでもしたのか、何かを落とした。

「何だ、こちらに飛んでくるようだぞ」

そう思っていると、その落下物は、目の前に直撃した。

聖曆 6000年2月 南方州への街道

「こんなに割のいい仕事なんて珍しいんじゃない」

「ああ、本当に裏がないのか怪しいもんだ」

ウイリーとラウルが暢気に話している。私はエルブレイ・マターハ・ナーウ。高名な冒険者だ。今回の仕事は西方の調査。ちよつと行つて帰ってくる簡単なお使いだ。報酬は竜3頭。普通に考えればこんなことはありえないが、これはご褒美みたいな物だ。我々の貢献度を考えれば無償で竜を提供すべきだが、他の冒険者との兼ね合いでこついった仕儀になったのであろう。役所の事情も勘案するのも名高きもの勤めだ。

この街道は、食欲そそるいい匂いが充満している。少し歩けば腹を裂いた人間が放置してある。食料には、まったく困らない。ご機嫌街道とも命名したいところだ。

しかし、ゆるりと仕事をするつもりはない。急ぎでこの仕事を終え竜を手に入れねば！！

「聖！急ぐぞ！」
「うお！」

おしまい

終末（後書き）

このような拙い文章にお付き合いしていただき、大変感謝しております。

また、機会があれば。 以下は設定です。

設定

エルフ：とある世界の頂点に立つ種族。完成種を自称する。基本的には女だけの種族で、無性生殖で子を産む為、遺伝子的に母親のコピーしか生まれない。同じ母親から生まれた娘一族を氏族という。

1000年周期で男が少数生まれ、王と呼ばれる。王との生殖により生まれた娘は必ず新規氏族となる。エルフの氏族数は3万。エルフ全体の人口は300万ほど。寿命は人間の約倍。体力的には人間より脆弱。しかし、魔法が使えるため優位にある。

文化レベルは紀元前レベルから23世紀まで。魔法があるため人類とはかなり異なる。

食性は肉食 主に人間を主食とし、魔因子法学（遺伝子工学）的に改良された人造乳製品も好んで食す。

人間：とある世界のエルフの家畜。原産種は既に絶滅しホルスタイン種、ウール種、モンゴ種、コーカ種、雑種が存在する。多くは雌が乳で乳製品、頭髪で繊維製品の生産に貢献。雄は牧草地の麦やもろこし等の生産に労働力として寄与。雄の場合、半数は幼児期にチーズの生産の原料や食肉目的とされることが多い。既に家畜化されて6000年近く、過去反乱があったという記録は一度も無い。宗教的にも家畜と定められた種。

日本：アレです。

大日本帝国：アレです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1361r/>

日本召還

2011年2月27日20時06分発行